

資料紹介 「岩手毎日新聞」から 生前批評・文芸関係記事

信時 哲郎

このほど「岩手毎日新聞」の文芸欄を中心にとめて閲覧する機会があったが、その際、『新校本全集』に収録されていない記事を見つけたので紹介したい。なお、原文のルビは省き、傍点等は残した。

また、『新校本全集 十六(上) 補遺・資料 補遺・資料篇』には、賢治が「岩手毎日新聞」に作品を集中的に発表した大正十二年に掲載された詩人・作家による詩篇と童話が列挙されているが、日付の誤記や掲載漏れが十数ヶ所見つかつた。ただし、大勢に影響はないと思われるのでここには載せない。

生前批評

A 啄木、夏村、宮沢さんと森(二)

たく木より森氏に至る岩手代表詩人の素描

月丘きみ夫

自分は詩集「春と修羅」を数度ひもといた。その都度自

分のバカが解つた。自分には宮沢さんの詩が解せないのである。春と修羅を読んで得るものは以上である。して詩といふものゝあらゆる高さ、深さは之以上にならないものかも知れないといふ驚威である。到底、犀星や朔太郎や春山行夫の植物の断面如きものではないのである。詩人佐藤惣之介の評によれば、高橋新吉は日本第一位に位する詩人な^{ママ}そうであるが、宮沢さんは高橋氏に二重丸を二つも三つも掛け足した詩人である、といふ。自分はこの言葉は決して的外でないと思つてゐる。

春と修羅の出たのは慥大正十二年頃か、と思ふが、爾後、沈黙に沈黙を重ねる氏ではあるが、識者はそのチャンスある毎に推奨してゐる。以て如何に秀れた詩、詩人であるかが理解されるのであらう。

たく木、夏村、宮沢、混沌としてある無しの岩手詩壇に三氏の名こそどんなに大なるものであらうか。われは郷土人を見るに決して眼鏡をかけてはゐない。以上三氏の

如きは自信を以て誇り得る人々である。たく木逝き、夏村死し、森佐一氏あれども今では宮沢さん一人である。が、氏は人も知る如く余りに謹厳で聖人である。われ／＼からかゝる忠言めいた否、紹介的な文を草さるゝさへ、如何にか苦痛であらう。而し一面、その天分を握りつづすと云ふ事は僕には何だか芸術への冒瀆のやうに思はれてならない。そうした変な老婆心的な氣持でついペンを把つたまでである氏の奮起こそわれ／＼の衷心より期待する限りである。最後に「岩手日報」文芸部を一手で切り開いてゐる森佐一氏を見逃してはならない。氏も矢張り天才の称をかまびしくした一人であつた。氏は詩壇一方の重鎮「学校詩集」には入つてゐる只一人の岩手人だ。岩日文芸欄が革新され世評を高めたのも一に森氏の努力に依るのだからは澆らつたる氏の再起こそ何物にも増して切望して止まないものである

×

たく木、碎花、夏村、宮沢、森、時代は幾多奔流した。われ／＼は郷土の雪の自然にも似た、かゝる高潔なる先輩を有難く思はねばならないそしてわれ／＼は今日の芸術のために、先人の名を汚さぬやうに努力しなければならぬ。

(昭和五年三月十九日付朝刊一面)

※「月丘きみ夫」は藤本光孝のペンネーム。儀府成一、母木光のペンネームも使つた。

B 退耕漫筆 地方の文芸(4) 岩手の詩人

佐伯正

芸術の批評鑑賞は、容易くはない。日本文学の最短形式たる俳句や短歌にしても、自分は制作上の経験なしに、他人の作品を評価することは困難である。美学の原理は解しても、自分は芸術創作の経験なき人の芸術批評が、往々にして正鵠を逸するのは、此の為である。私は俳句を作つた経験はあり短歌は四年前より熱心に作りもし今猶一層熱心に作つてゐるが、詩はよむ方が勝てゐて、創作の経験は極めて乏しい。従つて岩手にゐた足掛三年間にも、岩手の詩人に対し、あまり深い関心注意を向けなかつたが、その私の眼に三人の詩人がうつつてゐる。一人は花巻の私の道の兄たる宮沢政次郎氏の令息宮沢賢治君である。この人の「詩集春と修羅」は、私には十分に味識しえなかつたが、おそらく之れはいつの世にも極めて少数な特殊天分をめぐまれた詩人の尖つた詩集であらう。この詩集は蓋し一般人には最も理解し難い詩集であつて、世上の常識人に取りては殆ど「嚙語」の如く「謎」の如く感ぜられるであらう。私は三年前に君から「春と修羅」の恵与にあづかり、

反復熟読したあげく

難解と人のいひつる君が詩は青き灯ともしよむべかりけり

鼻のやみよひかれる眼をめぐめ我れしつばらに君が詩を解かむ

君が詩を黄金の文字か白金の文字にしるしてやみによまゝし

の三首の歌をよんだことを想起する。この詩人は疑ひもなく岩手には空前の詩人であると同時に稀有の人道主義者であらう。空前のヒューマンタリアンである。郷土第一の富豪を外祖父として生れながら、彼は外祖父一家の生活態度が外祖父一家が自己の主義理想に遠きの故を以て、断じて足を向けないといふ徹底した理想家である。花巻の町外れの丘陵に掘立て小屋を建て、そこに起臥して畑を打ち晴耕雨読の生活を営み、附近の児童を集めては、蓄音機を鳴らし、童話をもしたり、農夫達の教師としては土質改良や施肥上の指示者となつたりして来た。私は此の人に於て、来るべき新時代の理想的人物の面影を見る。彼には殆ど私欲がない。名利の念がない。彼にあるものは、仏者の所謂利他の念と、濟世の熱意と、高雅清純な芸術的享楽、だけであらう。彼にはまた若人の心に燃えがちな、異性に対する欲念すらも超克してゐると見え、近親が結婚をすゝめても、

「私は早熟の人間で、性の問題は既に通過してしましたから、幸に安心せられよ」と答へたといふ実に彼は稀有の麒麟児であり、無比なユニツクな人格の持主である私は信ずる彼は盛岡高等農林学校が産した最も光つた人物の一人である。私は天が彼に与ふるに健康と長命を以てして、農聖の域に進み且つ後世にのこすべき輝かしい幾多の詩を生ましめんことを熱禱せざるを得ない。私は岩手の文学青年達や、プロレタリア詩人を以て任ずる人々に対し、この人を見よ、この人の芸術と生活態度と実行とを見よ、と寄語するものである。この人を見て、而して猶東京辺のガサツな躁狂的なプロシヤ人や、プロシヤ人の悪影響を脱し得ざる者は、恐らく真の芸苑からの追放者たるを免れぬであらう。

(昭和五年十月八日付朝刊一面)

※ 佐伯正は岩手県の元・社会事業主事である。賢治は佐伯に宛てた書簡下書(昭和六年三月推定)を残し、「文語詩稿 一篇」には「社会主事 佐伯正氏」がある。

C 岩手詩集に賛す(A)

吉野信夫

母木光君から「岩手詩集」の読後感を求められてから既に相当の時日が経過した。が私は忙中閑を見てどうしても

この詩集の批評——といふよりも寧ろ感想的なモノログを書き連ねて、その責を果さねばならないと思つた。

◇

それはこのアンソロジーが内容の割合にぱつとしないそれに比べて、編纂者である同君の悲壮な意気込みの男らしい態度に依つて無事世上に運び出されたことをそれとなく、後記にも認められてある通り、心嬉しく思はれたこと、第二に一つの詩華集なり詩集を刊行して、何等かの意味で新しい創造の意欲の流れを、われ／＼読者の眼に映せしめる何物かゞ介在するそれ／＼その或るものが、果してこの全巻を通じて読み私は感得せしめられたものがあつたからである。

◇

私はいまゝで、地方文芸界に在つて、然もわれ／＼が最も関心を有するところの詩野——詩及び詩人の集団的存在について、岩手県にこれだけの詩を書く人が数多く然も相当地な文学的標準に達した詩作品を生産しつゝある人々の在るを知らなかつた。岩手県が啄木を生んだ有名な土地であることはもとより知つてゐた。そして現在、奇異な存在としての詩人、宮沢賢治君が存在してゐるといふこともそれとなく知つてゐた。

いま、此処にこれだけの多数の詩人を網羅して一丸とな

り、世上に運び出されたことは、私にとつて更に一つの大きな驚異と興味との期待を加えるものであり、且詩の地方的興隆の好き一例を眼前にまざまざと発見するの力強い喜びもあらねばならぬ。四五の比較的詩人の生涯の古い人々も含め、物故した或は物故したかもしれぬ詩人も併せ、簡単な読後感を勝れた詩人の作品を中心として、他に一寸傍系的な寸言を試み度い。

(昭和七年五月八日付朝刊一面)

〔注〕 本資料は、宮沢賢治に関する部分のみを抄出した。

D 岩手詩集に賛す(B)

吉野信夫

宮沢賢治「早春独白」けだしこの「岩手詩集」全巻を通して、現存詩人としにの作では、圧巻の最高位に位置される可きものであらう。然し私は正直に言つて草野心平君が、宮沢賢治の芸術は世界的であるとか、伊福部隆輝君や母木光君が推称する程の、私流に言はせれば高い芸術的薫育に発光されてゐる詩人であり芸術創造の為す詩人であるとは、さう迄で高く評価はされない。只例へば高橋新吉君の生活行動を芸術作品に対する奇異な感じに於ける、芸術的魅力の如く、違つた意味と立場からして、私は私自身で、純高

潔癖な或る高邁な作品的魅力を、宮沢賢治君の作品全体から受け取る。そして従来の如何なる詩人の作品も持ち得なかつた宮沢賢治君的な芸術創造の或る種の光輝を感得する。それは如何にも讚熟された情熱の外部発散の妖光が持つ燐火のやうなうねりの呻吟である。此の何よりも模倣の追従し得ない個性の輝きの世界――それは草野心平君が云ふ如く世界的芸術では断じて無くとも、或る一つの小さな個性の創造に輝く世界を持ち得てゐる点にこそ、私は宮沢賢治君の存在を喜び、且魅力を感じてゐる所以である。

(昭和七年五月九日付朝刊一面)

〔注〕 本資料は、宮沢賢治に関する部分のみを抄出した。

E 詩人詩頌(下) 岩手詩人の横顔詩

及川儀三

◇宮沢 賢治

掃清められたる蒼天

なにかしら天国の香気がいつぱいに充ち

銀線が数限りなく放射される

(昭和七年八月二十二日付朝刊一面)

〔注〕 本資料は、宮沢賢治に関する部分のみを抄出した。

文芸関係記事

F 母木君への私信(上) 岩手詩集に就て

佐伯郁郎

◇読んで行く中に随分なつかしい顔にも出逢ひ、未知の沢山の顔にも出逢ひました。啄木はいはずもがな、細越夏村氏は学校の先輩ともきいてゐて遂お目にかゝれないのでしまつたし、宮沢賢治氏にはお目にかゝつたことがないのですが御親類の安太郎さんを通じて「修羅と春」をいたゞいてゐます。後藤郁子氏にはいつか三省堂の食堂で夫君内野健児氏とコーヒーを啜つて居られるのに出逢つて、初対面の挨拶を交はしたことがあります。吉田孤羊氏には遂近頃朝日新聞社の前でばつたり逢つて、お互に久闊を述べ合ひました。今は詩筆を絶つた宮田新八郎君には、殆ど中学来でせう、檀女礼氏の舞踊会が国民講堂であつたとき偶然に逢ひました。栗木幸次郎君とは時々逢つてゐます。照井詠三氏及び加藤健、伊藤星司の二君とは親い間柄ですし、その他高橋芙蓉、安藤那夏野、及川涙果、南城幽香織田秀雄氏はみな旧知の懐しい人達です。更にまだ逢つたことはないが、町谷順、長沢玄光、伊藤行人、室町清の諸氏は折に触れてお名前だけは知つてゐます。

(昭和七年六月二十四日付朝刊一面)

〔注〕本資料は、宮沢賢治に関する部分のみを抄出した。

G 岩手詩壇一瞥 二五九二年上半期を総算す

及川儀三

1、序説

岩手の詩壇を一瞥して、恰も本格的に現詩壇に呼びかけることは到底、私の力では望まれないことながら、岩手既成詩壇の崩壊顛落と相俟つて、その試練動揺時代を報ずることは無意義なことではない。即ち澎湃として時代に闘はんとする新詩人群への一抹の役割であり、惜しみなき提携へのかゞやかしい出発となるのであるから。

嘗つて詩人時代六年八月号に、仙台の詩人鈴木健太郎君が「東北詩壇の現状を報ず」として極めて概念的な報告を行つた。降つて同誌七年四月号に母木光君が「岩手詩壇ノ一ト」として最近数年間の情勢を報じ、しかも五月同君の詩壇へもつ理解と光焰とは、岩手詩集の誕生あらしめ、真実深い歴史的事業をのこされた。彼氏一個の生命によつて成つたといつてもいゝこの詩華集は、将来詩壇的発展の光芒ともなり、及んでは岩手芸術の方向を価値あらしめ更生せしむるであらう。二五九二年における詩壇の恩人母木君

に最善の感謝をそゞぐもの、決して詩壇人のみでなからうことを信ずるのである

さればにや詩人時代編輯者吉野信夫君は一般的なその賛を寄せ、佐伯郁郎君またその方途を祝する一文を岩毎社におくつた。しかるに岩手現詩壇の人々において、ともあれこの岩手の光野の誇りと、その存在を賞揚するものはなかつた。私は思ふ此処に登壇した八十の詩人と、なほ一輯に文献し得なかつた数十の詩人を擁するとすれば、決して岩手詩壇の過去現在の詩圏は、全国詩壇の動向と価値的存在に勝りはすれおとつてはゐない。しかも機運をあらしめたるもの幾多個人先輩(富田碎花、石川啄木、細越夏村(故人)宮沢賢治堀内鱗泉等)の力ありしとはいへその過半期において森惣一、生出仁等の更生的烽火によつて現はれた岩手詩人の総動員であらう。その機関誌「貌」は、新旧すべてを網羅し、当時の既成詩壇への炎上を確実ならしめた。真にその爆弾は国有詩壇新人として斎藤光一郎栗木幸次郎、森惣一(北小路幻)生出仁(桃星)等推称せられ、方に岩手詩壇をしてかぐはしい春あらしめ、続々として同人詩誌の創刊を見た。「東方文学」、「黄色い貌」、「三角茶街」、「岩手詩集」、「天邪鬼」等その他十数誌しかしその名にもれず三号誌の名のもとに影を没した。「青い扉」の出現もその当時であつて、生出桃星、小野寺路茂等の援助のもと

に高橋康之、秋田耿之、小田耕村及川儀三等編輯してゐたのであるが、五号にして経費難で廃刊したその後、詩性（及川儀三編輯）、貨物列車（伊藤行人編輯）、詩芸術（堀米健一編輯）等デビューしたのであつたが、結局長くはつゞくべくもなかつた。

而して小田原一郎、清水長太郎堀米健一、松本欣一、長岡恒雄、平出千城、星山栄一郎、南城幽香上沼利三、城久夫、小守文之、岡山峻三、原美夜衣、菅原寛一、中務三平等海鳴りの如く輩出したのであつたが、織田秀雄君の新興教育問題の波及から、すっかりその姿態を絶つに至つた。生出仁並に宮沢賢治等多くの詩を書架へ深くひそめ、臥龍ならしむることは、真に詩壇の一大損失である。しかしてまた斎藤、宮田、栗木等の存在はいづれに行きしか。

2、新しい過去としての詩壇

「貌」の時代はある大きい物をもつてゐたとはいへ、杜クマ生出、宮沢の沈黙によつて、沈滞に胚胎したまゝ二五九二年の下半期をむかへた。けれども蹶起その詩野を横打し、貌時代の活潑なる活動を意義づけるものはなかつた、手堅い握手をするものはなかつた。思想と経済との困難は、寂寥たる詩壇にも見られ、目覚むべき冬眠をもちながら、確信ある詩人の台頭はなかつた。余りにも苦悶し、混濁し、

不思議なほど岩手の詩野は、不合理な不自然な触感に甘んじてゐた。それか当然の境地であつたらうとも思はれる。

3、現詩壇に集る人々

新しい詩人として若々しい生彩と弾力としかも繊細なる感情を惜みなく表し、郷土より中央へ、そして完全に冷靜なる中央詩壇の混沌を一蹴する岩手詩壇詩人群の持つ行道は、如何なる人によつてなされべきか、佐伯郁郎、加藤健、母木光、八重樫雄三、岡崎澄衛等数氏に期待をかくるとはいへ、なすある才人、生出、栗木、小野寺等外に小守文之、菅原寛一、原美夜衣の失走と、宮沢氏の沈黙である。

二五九二年下半期における詩壇の強味は、ひたむきに踏進する力と、共々に手を握り合ふ合一体への足並であるかゝるが故に自ら天才人にかくる私の期待は決して小なるものではない。

（昭和七年七月二十八日付朝刊三面）

〔注〕 本資料は、宮沢賢治に関する部分のみを抄出した。

H 「女性岩手」に就て（下）

「女性岩手」は既に月刊第二号を重ねてゐる。こゝに主

石橋哲郎

要なる記事の標題とその執筆者の名を挙げ概略的紹介を試みよう。

◇一般女性問題に関するもの

若き近代女性に語る 佐藤大峰

婦人の自覚 中田短足庵

偶感片々 八重樫祈美

婦人と猿 和賀之介

恋愛と情死 坂上真幸

◇郷土の特殊研究に関するもの

花巻人形 砂金令行

水押人形芝居に関して 村田幸之助

◇随想随筆

めきしこ漫談 梅原靄

友吐さまさま 辻真一

故郷に問ふ 新井正市郎

鮮満の旅 八木英三

九條武子夫人の想ひ出 佐伯正

岩手の女性 同

盛岡・黒沢尻 瀧本次郎

忍苦と統制 八木英三

子供の嫉妬 三田憲

◇研究

朝顔の遺伝から 佐藤純一郎

◇詩

民間薬・選挙 宮沢賢治

終焉（ランダー）十年（ローウエル・エー） 石橋

哲郎訳

◇短歌

松籟・樂余吟 関徳弥

その外、一般読者のため文芸欄生活問題欄を開放し、職場通信としての働く婦人の日記、或は読者通信を歓迎してゐる。

（昭和七年十一月六日付朝刊一面）

〔注〕 本資料は、宮沢賢治に関する部分のみを抄出した。

※ 「女性岩手」 目次によれば、中田知足庵、阪上真幸、反吐さまさま、業余吟。

